

論文

明治時代の長野県における優等児及び劣等児の指導に関する史的研究 —松本尋常高等小学校の『優劣等児童に関する調査』について—

中 嶋 忍*・河 合 康**

本研究は、明治40年代の松本尋常高等小学校における優等児と劣等児の実情を明らかにした。具体的には、『優劣等児童に関する調査』を基に、優等児及び劣等児の調査の目的と内容、対象児の身体面・精神面に関する結果、対象児の学力と家庭環境に関する結果、に焦点を当てて、当時の優等・劣等に対する考え方について検討した。その結果、主に次のことが明らかとなった。調査は、児童の身体面・精神面・学力面と家庭の職業・経済状況の15項目であったこと。対象児の生まれた順番は、優等・劣等に影響がなかったこと。体格は、男女または優等・劣等によって違いが見られたこと。感覚器官は、劣等児に耳・口・目・鼻などに問題のある者が多くいたこと。学力は、優等児が上位であったのに対し、劣等児では中位の成績が多く、下位もいたこと。保護者の学歴は、両親ともに高学歴が優等児にいた一方で、小学校を修了していない両親が劣等児の約半数にいたこと。

キー・ワード：松本尋常高等小学校、優等児、劣等児、明治時代

I 問題の所在と目的・方法

現在の全国共通の教育が確立されたのは、明治時代の日本の近代化においてである。これには、2つの要因がある。1つは、日本政府の「富国強兵」政策によって国民を団結させる必要があったことである。もう1つは、諸外国と同様に全国を共通の法律によって治める「法治国家」を確立させようとしたことである。これらを実現させるには、日本国民としての基礎的な知識とアイデンティティを養成しなければならない、そのために教育を導入することになった。

そこで明治政府は、教育機関として「小学校」を各地に設立させ、就学する年齢や期間・教育内容などを定めた。これが1872（明治5）年に制定された学制である。学制によって教育の義務制や課程主義などが導入された。教育の義務制は、小学校に就学する学齢児がいる保護者に就学の義務を課したものである。また課程主義では、学制で定められた所定の課程について習得していれば進級あるいは卒業が認められた。この近代的教育によって全国で小学校が増えるとともに、就学者数も徐々に増えていった。

学制を最大限活用したのは、旧・筑摩県¹⁾であった。旧・筑摩県では、後に権令²⁾となった永山盛輝が参事に就任した時に、大胆な教育政策を打ち出した。県独自の政策は、1872（明治5）年2月の『学校創立告諭書』であった。これは、四方を山に囲まれて産業振興が難しい山国において、世の中のためになる優れた人材を輩出させる学校教育の必要性を県民に訴えたものであった。しかしこの告諭書は、国が同年8月に学制を施行して学校教育を開始することを見て、県独自の政策を取り下げた。告諭書を取り下げたものの、旧・筑摩県の就学率は全国平均が20%台後半であったのに対し、すでに50%超であった。この後は、1876（明治9）年に現在の長野県が誕生し

て60%台前半となった。

このように就学率の向上は、多くの学齢児が小学校に集まることを意味した。そこで長野県では、1つの学年を複数の学級で構成させる場合の編制方法について議論がなされていた。この議論と同時期には、学力によって学級を分ける方法を採用した小学校があった。これが松本尋常小学校（現在の松本市立開智小学校）である。

松本尋常小学校は1890（明治23）年4月1日、在校生を学力（成績）を中心として分け、上位から順番に入級させていく学力別学級編制を採用した（中嶋・河合、2006）。これは、1つの学級内の児童の学力を一定にすることで指導の効率性を高め、すべての児童の学力を向上させる狙いがあった。この編制法は、最下位の学級に劣等児を集めたことから、日本の劣等児対策に関する教育を誕生させたとされている（中嶋・河合、2018）。しかし、これは様々な問題を生じさせ、4年間で終了された。その後、松本尋常高等小学校（松本尋常小学校の改組）は、劣等児対策の教育及び指導方法などの研究を兼ねて1908（明治41）年4月に学級を再び設置した（中嶋・河合、2015）。しかし1912（明治45）年3月には、終了になってしまった（中嶋・河合、2016）。

本研究は、明治40年代の松本尋常高等小学校における優等児と劣等児の実情を明らかにした。具体的には、在籍生を対象に優等児及び劣等児に関する実態調査を行い、これを『優劣等児童に関する調査』と題して信濃教育会の機関誌『信濃教育』に発表していた。したがって今回はこの実態調査の論文を基に、1. 優等児及び劣等児の調査の目的と内容、2. 対象児の身体面・精神面に関する結果、3. 対象児の学力と家庭環境に関する結果、に焦点を当てて、当時の優等・劣等に対する考え方について検討した。また本研究は障害児教育の歴史研究であり、現在の社会的背景や教育倫理などとは違うため、当時の考え方や用語については原語を用いた。

本文中の引用史料については、次のように表記した。史料中

* 無所属

** 上越教育大学大学院学校教育研究科

表1 出生の順番に関する調査結果

[illegible]

の漢字及び文字は原文どおり旧字体を用いたが、一部については常用漢字などにした。史料中の文字の脱落については、脱落部の直後に括弧書きで補足をした。また表の史料は、原文を再び記述して引用した。史料などの引用部には、引用ページを付記した。

Ⅱ 優等児及び劣等児の調査の目的と内容

松本尋常高等小学校は、「教育品展覽會に出品すべく我校にてはかつて余が調査せし、『兒童の出生月と學力との關係より見たる圖表』に併せて右の如き調査をと校長からの照會があつたので（中略）ここに整理を付けたところ種々（「の」の脱落か？）面白い結果があるのでここに發表して縣下諸賢の高評を乞いたと思ふのである。」（松本尋常高等小学校 [1909] 3）と示すように、後に掲げた項目と學力の關係性についての結果をまとめている。ここに記されている「余」とは、1908-1911（明治41~44）年度まで置かれていた劣等兒（成績不良兒）學級の初年度と次年度を担当した輪湖卓三であつた。この發表論文に関しては、松本市の旧開智學校³⁾に所蔵されている『優劣等兒童二関スル調査書』があり、同じ内容が手書きで書かれている。また後に輪湖は、自作の調査票を用いて成績不振の兒童を調査し、『成績不良兒童特殊教育狀況』をまとめた。

調査の目的については、「優等児、劣等児の諸方面は如何であるかと云ふのが抑の調査の動機であつて、目的も亦其處に存するのである」（松本尋常高等小学校〔1909〕4）と記していて、児童の優劣を決める要因を探ろうとしていたことが分かる。また児童の選定については、「尋一は之を省き、五十七學級他の學年學級五十七ヶ學級より各優劣児を三名づゝ受持教師の判定により撰定せるもので總數三百四十二名である」（松本尋常高等小学校〔1909〕4）と示しているように、尋常1学年を除いた57學級から1學級3人ずつの優等児と劣等児を選出

して計342人の者について調査するとしている。この選出に当たっては、各学級の受持教員が選定していた。

次に調査の項目については、①父母の結婚の関係、②分娩次序、③分娩月日、④分娩当否、⑤遺伝病の有無、⑥父母飲酒喫煙の程度、⑦児童の体格、⑧覚官の完否、⑨気質、⑩主に学科に対しての長所、⑪主に学科に対しての短所、⑫学力平均、⑬財産の程度、⑭職業、⑮父母の教育の程度、の15項目であった。ただしこの論文には、調査結果として対象児の人数のみしか掲載されていないものである。しかしこの項目の中には、①・③・④・⑥のように個人的事項も見られるので、問題があると考えた。したがって今回は、これらについては取り上げないことにした。

Ⅲ 対象児の身体面・精神面に関する結果

対象児の調査結果について松本尋常高等小学校は、最後に「題目の示す如く、兩極端のかゝる結果は、之を中等に及ぼすも甚しき誤謬なき想像を得べきものと思はれる」（松本尋常高等小学校 [1909] 8-9）と記しており、優等児と劣等児の特性を見いだせたとして「結果に対する意見」として締め括っている。

「分娩次位」は表1（松本尋常高等小学校 [1909] 4-5）にあるように、兄弟姉妹の中での対象児の出生の順番についての結果を示している。結果を見ると出生の順番は、優等劣等に男女差は関係なくほぼ同じ割合であった。

児童の遺伝病については、「調査の困難なると、實際の點に於て父兄の眞實を語らざる點も多少あるならむ（「む」は原文通り）、其殆ど大多數が「遺傳病無」と記載されてあるので此に省くこととする」（松本尋常高等小学校 [1909] 6）と記されていて、保護者自身のことにもつながるので語ろうとしないとしている。

表2 身体及び精神に関する調査結果

七、体格	強	中	弱	八、覺官の完否	否、耳、一、	目、二、	九、氣質	神經質	多血質	膽液質	粘液質
	優	三〇	六四	六九	優		一般ニ不完全ノモノ一四	優	三五	四〇	二二
	男	男	男	男	男			男	男	男	男
	劣	二七	六四	六九	劣			男	男	男	男
	男	男	男	男	男			男	男	男	男
	優	四四	二五	七二	優	耳十二、(一二二)	一般ニ不完全ノモノ一四	優	一三	二一	三七
	男	男	男	男	男	目、八		男	男	男	男
	劣	二四	四五	七二	劣	口、十、(一〇〇)		男	男	男	男
	男	男	男	男	男	鼻、二		男	男	男	男
	優	二五	二	七二	優			優	二一	三七	七二
	男	男	男	男	男			男	男	男	男
	劣	二四	四五	七二	劣			男	男	男	男
	男	男	男	男	男			男	男	男	男

表3 学習に関する調査結果

計	一 點	二 點	三 點	四 點	五 點	六 點	劣	九 點	十 點	優	十二、 學力平均	技 的	史 的	理 的	十一、 短所	技 的	史 的	理 的	十、 長所				
	九 九	〇	一	七	二 三	二 六	男	九 九	七 五	二 四	男	九 九	六 二	一 五	二 二	優	九 九	一 九	三 六	四 四	優	男	
	七 二	一	三	四	一 二	二 四	二 六	女	七 二	五 二	〇	女	九 九	一 二	二 四	六 三	劣	九 九	四 六	三 六	一 七	劣	男

体格は表2（松本尋常高等小学校 [1909] 7）のとおり、男子で優等児も劣等児も84.8%が「中」体格であった。また男子の「強」体格は、両者とも3割前後であるが、優等児が多かった。一方、男子の「弱」体格は劣等児がやや多い。これに対して女子は、優等児の約6割が「強」体格で、劣等児の約6割が「中」体格である。約3割の女子は、優等児が「中」体格、劣等児が「強」体格であった。そして「弱」体格は、両者ともごく少数である。

表2の「覚官の完否」は、感覚器官に問題があるか無いかについての結果を示したものである。これによると優等児は、「耳」が1人(1%)「目」が2人(1.2%)としている。これに対して劣等児は、「耳」と「目」に加えて「口」と「鼻」にも問題がある児童がいた。具体的には、「耳」の問題が12人と劣等児の7%を占め、「口」が10人(5.8%)、「目」が8人(4.7%)、「鼻」が2人(1.2%)となっている。また劣等児に

は「一般二不完全ノモノ」が14人示されており、全体の8.2%を占めている。

表2の「氣質」については、「個人の行動を規定する身体的・素質的な特性で恒常的なものとみなされ（中略）ヒポクラテスは体液から氣質を分類」（外林ら [1981]88）したとされている。そこではヒポクラテスが氣質を、多血質・憂うつ質・胆汁質・粘液質の4つに分類したとしている。1つ目の多血質は、「楽天的な気分やで多弁」（外林ら [1981]88）なものとしている。2つ目の憂うつ質は、「陰気くさくふさぎや」（外林ら [1981]88）のものである。3つ目の胆汁質は、「激情的でおこりっぽく不満が多い」（外林ら [1981]88-89）ものとされる。最後に4つ目の粘液質は、「不活発で無関心」（外林ら [1981]89）のものでとされている。また神経質は、広辞苑によると「①過敏または繊弱を特徴とする心的性質。性格特性の一つ。②こまごまと気を病むたち。また、そのさま。」とある。これら

表4 家庭及び保護者に関する調査結果

十三、財産の程度	上	中	下	計	十四、父母教育の程度	母父高	母父中高	母父中	母父普中	母父普	備考	十五、職業	教員	官吏	會社員	農	工商	工人	軍醫	備夫	無	
優	二七	二七	二七	一七一	優	一	一	一九	五	六九	三八	三八	一七一	一三	一二	一四	七五	二四	八	六	四	八
劣	〇	一一	五九	一七一	劣	〇	〇	三	一三	二五	九二	一七一	二	〇	一一	三三	五六	四三	二	六	一七	一七
													とは父高等教育を受け、母は中等なるを意味す	高Ⅱ中學程度卒業以上のもの	中Ⅱ小學卒業以上のもの	普Ⅱ小學を卒業せざるもの						

を踏まえて 優等児の男子は「多血質」が40.4% (40人) と最も多く、続いて「神経質」が35.4% (35人), 「胆汁質」が22.2% (22人) の順となり, 「粘液質」が2% (2人) と少数であった。一方, 優等児の女子は「胆汁質」が51.4% (37人) と最も多く, 「多血質」が29.2% (21人), 「神経質」が18.1% (13人) となり, 男子と同様に「粘液質」が1.4% (1人) と少数であった。これに対して劣等児の男子は, 「粘液質」が60.6% (60人) と最も多く, 「多血質」が23.2% (23人), 「神経質」が11.1% (11人) と続き, 「胆汁質」が5.1% (5人) と少数であった。また劣等児の女子は, 男子と同様に「粘液質」が81.9% (59人) と大半を占め, 「多血質」が11.1% (8人) が次に多く, 「神経質」が4.2% (3人), 「胆汁質」が2.8% (2人) で1割以下となっている。

「長所」と「短所」については、学習面における利点あるいは欠点について、表3（松本尋常高等小学校 [1909] 7-8）のよう示されている。表3に記されている「理的」・「史的」・「技的」は、説明など示されてはいないが、学習面に関係することから、次のような思考過程に関することを指すと考えられる。1つ目の「理的」は、物事を道筋立てて考えを導き出すことである。2つ目の「史的」は、物事を過去の経験などを参考にして考えを導き出すことである。3つ目の「技的」は、物事を直感的に捉えて考えを導き出すことである。これらを踏まえて長所は、優等児と劣等児ともに男女が同じ割合になっていた。具体的に優等児では「理的」が男子44人・女子34人と44～47%であり、ついで「史的」が男子36人・女子24人と33～36%、「技的」が男子19人・女子14人と19%の順であった。これに対して劣等児では「技的」が男子46人・女子29人と40～46%を占め、「史的」が男子36人・女子26人の36%、「理的」が男女ともに17人と17～23%であった。一方、「短所」は「長所」の反対に、「理的」と「技的」が逆転している。ただし女子の劣等児は、少し異なった結果になっている。具体的に優等児は、「技的」が男子62人・女子33人（45～62%）、「史的」が男女15人（15～20%）、「理的」が男子22人・女子24人（22～33%）であり、劣等児の場合男子が「理的」63人（63%）、「史

的」24人（24%），「技的」12人（12%）であった。しかし女子（劣等児）の場合は，「理的」41人（56%），「技的」17人（23%），「史的」14人（19%）であった。

IV 対象児の学力と家庭環境に関する結果

学力平均⁴⁾については、具体的なことが示されていないが、個々の児童の過去の試験結果を平均して、それを10点(點)満点で表記したもので、児童の学力分布を示していたと考えられる。これを踏まえて学力平均は表3のとおり、優等児の男女ともに「九點」が7割(男子75人・女子52人)を占め、「十點」が2割強(男子24人・女子20人)であった。しかし優等児は、この2つのみに収まっていた。一方、劣等児は男女で異なっていた。男子は、「五點」が42.4%(42人)と最も多く、「六點」が26.3%(26人)、「四點」が23.2%(23人)、「三點」が7.1%(7人)、「二點」が1.0%(1人)であった。これに対して女子は「六點」が36.1%(26人)と最も多く、「五點」が33.3%(24人)、「四點」が16.7%(12人)、「三點」が5.6%(4人)、「二點」が4.2%(3人)であり、女子のみ「一點」が1.4%(1人)いた。

表4(松本尋常高等小学校[1909]8)の「財産の程度」とは、家庭の経済状況と学力の関係を調査することをねらいとしたと思われる。この結果から経済状況は、優等児の74.3%(127人)と劣等児の64.9%(111人)ともに「中」が多かった。また優等児は、経済状況の「上」が15.8%(27人)いる反面、「下」も4.1%(7人)いた。これに対して劣等児の家庭は、「下」が34.5%(57人)であり、「上」がいなかった。

「父母教育の程度」(表4)は、保護者の受けてきた教育と児童への教育に及ぼす影響についての結果を示している。1つ目は、両親ともに高等教育修了以上⁵⁾が優等児1.0%(1人)で、劣等児にはいなかった。2つ目は、父親が初等教育修了以上⁶⁾で母親が高等教育修了以上が優等児1.0%(1人)で、劣等児にはいなかった。3つ目は、父親が高等教育修了以上で母親が初等教育修了以上が優等児11.1%(19人)に対し、劣等

児は1.8%（3人）であった。4つ目は、父親が高等教育修了以上で母親が初等教育未終了⁷⁾が優等児で2.9%（5人）、劣等児で7.6%（13人）であった。5つ目は、両親ともに中等教育修了以上が優等児で40.4%（69人）と最も多く、劣等児が14.6%（25人）であった。6つ目は、父親が初等教育修了以上で母親が初等教育未修了が優等児及び劣等児ともに22.2%（38人）であった。最後に7つ目は、両親ともに初等教育未修了が優等児22.2%（38人）、劣等児で53.8%（92人）と、劣等児では半数を占めていた。

表4の「職業」は、保護者の職種を調査した結果を示したものである。この結果から最も多い職種は、両者ともに「商」が優等児で43.9%（75人）、劣等児で32.7%（56人）を占めていた。次に多いのは「工」で、優等児が14%（24人）、劣等児が25.1%（43人）であった。3番目に多いのは「農」で、優等児が8.2%（14人）、劣等児が19.3%（33人）であった。このように上位3つは同じであり、優等児66.1%、劣等児77.2%がこの3つで占められていた。これ以外については、優等児が「教員」7.6%（13人）、「官吏」7%（12人）、「軍人」と「無」4.7%（各8人）、「会社員」4.1%（7人）、「医」3.5%（6人）、「傭夫」⁸⁾2.3%（4人）の順であった。一方、劣等児は「会社員」6.4%（11人）、「官吏」5.8%（10人）、「傭夫」と「無」3.5%（各6人）、「教員」・「軍人」・「医」が1.2%（各2人）であった。

V まとめ

本研究は、明治40年代の松本尋常高等小学校における優等児及び劣等児に対する実態調査について検討した。その結果、次の点が明らかになったとともに、今後の課題が示された。

1 優等児及び劣等児の調査の目的と内容について

松本尋常高等小学校は、教育品展覧会に出品した『優劣等児童に関する調査』について、その結果を信濃教育に掲載して長野県内の教職員に見てもらい意見を得ようとした。この調査は、優等児と劣等児を規定する要因がどのようなものかを探ることを目的としていた。

調査は、次の方法であった。対象学級は、尋常1学年を除く57学級であった。対象児童数は、1学級から優等児3人・劣等児3人の計342人であった。これらの児童は、各学級の受持教員が選定した。

調査の項目は、保護者に関することから職業・経済状況と児童の身体面・精神面・学力面についての15項目であった。

2 児童の身体面・精神面に関する結果について

対象児の身体的なことに関しては、次のとおりであった。生まれた順番（分娩次位）に関しては、優等劣等に男女差は関係なく、ほぼ同じ割合であった。ただしこの時代が多子傾向であり、兄弟が多くなるにつれて人数が少なくなっているのは、これらの家庭の事情で小学校に通っている児童が少ないことが要因であったと考えられる。2つ目の遺傳病に関しては、保護者自身にもつながってくる事項なので話そうとはしなかった。3つ目の体格に関しては、男子で「中」体格が8割、「強」体格が3割前後、「弱」体格が1割弱であった。また男子は「強」が優等児、「弱」が劣等児の方がそれぞれやや多かった。一

方、女子は男子と異なっていた。優等児は「強」体格が6割、「中」体格が3割であった。劣等児は「中」体格が6割、「強」体格が3割であった。そして女子の「弱」は、男子と比べてもごく少数であった。4つ目の感覚器官に関しては、優等児にも耳と目に問題のある者がいた。これは耳が1人、目が2人であった。一方、劣等児は耳・口・目・鼻に問題のある者がいた。これらの問題は、1割弱であった。しかし劣等児には「不完全なもの」とされる項目があり、1割を占めていた。この時代背景などから「不完全」とは、人格面や学力面に直結する知的発達の問題であった可能性がある。

対象児の内面に関しては、次のとおりであった。5つ目の気質に関しては、優等児の男子が多血質・神経質・胆液質・粘液質の順であった。一方、劣等児の男子は粘液質・多血質・神経質・胆液質の順であった。また女子は、優等児が胆液質・多血質・神経質・粘液質の順であった。劣等児は、粘液質・多血質・神経質・胆液質の順であった。6つ目の長所と短所は、劣等児の女子を除いて優等児と劣等児では違いがあるが、男女に違いが見られなかった。具体的には、次の点であった。優等児の長所は、理的が5割弱で史的が約3割、技的が約2割であった。劣等児の長所は、技的が5割弱で史的が3割、理的が約2割であった。一方、短所は長所と逆にになっていた。具体的には、優等児が技的（約4～6割）、史的（約1～2割）、理的（約2～3割）、劣等児の場合男子が理的（約6割）、史的（約2割）、技的（約1割）であった。しかし劣等児女子の場合は、理的（約5割）、技的（約2割）、史的（約1割）であった。

3 児童の学力と家庭環境に関する結果について

対象児の学力に関しては、次のとおりであった。7つ目の学力平均は、優等児が10点と9点の者で占めていた。一方、劣等児は6点～1点に入っていた。人数は、優等児の9点と劣等児の6点（女子）・5点（男子）が多数であった。

対象児の家庭内に関しては、次のとおりであった。8つ目の家庭の経済状況は、両者とも「中」が多く、優等児には「上」もいれば「下」もいた。一方、劣等児は「上」がいなく、「下」が3割を超えていた。9つ目の保護者の教育状況は、両親ともあるいはどちらかが高学歴の場合に、優等児が少数いた。一方で両親ともに初等教育の未修了の者では、劣等児の半数を超えていたが、優等児も2割強みられた。10つ目の保護者の職業は、「商」・「工」・「農」の3つが上位を占めた。これは、優等児と劣等児に違いがなかった。また劣等児の場合は、「教員」・「軍人」・「医」の者がごくわずかであった。

4 今後の課題

今後は、松本尋常高等小学校で試行錯誤して研究された劣等児対策と同時期に、長野県長野市の公立小学校での優等児に関する教育実践について明らかにすることが課題として残された。

謝辞

本研究に関して安曇野市中央図書館の皆様には、史料の複写など多大なご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 旧・筑摩県は、現在の長野県の西側（松本などの中信地域）・南側（飯田などの南信地域）と岐阜県の北側（高山などの飛騨地域）が1871（明治4）年に合併して誕生した。その後、県は飛騨地域と分離して、長野県の北側（長野などの北信地域）・東側（上田などの東信地域）と合併し、1876（明治9）年に幕を下ろした。県庁は、現在の松本市に置かれた。
- 2) 「権令」とは、現在の県知事に相当する役職である。
- 3) 旧開智学校は、1876（明治9）年に建設された校舎の本館部分を移築・保存して1963（昭和38）年に教育博物館として開館した。これは、1961（昭和36）年に国の重要文化財に、そして2019（令和元）年に国宝に指定された。
- 4) 表2中の「学力平均」は、「七点」と「八点」が引用史料に掲載されていないため、これらを省いた。
- 5) 「高等教育修了以上」とは、中学校（現在の高等学校）を卒業程度以上の者のことである。
- 6) 「初等教育修了以上」とは、尋常小学校・高等小学校あるいは小学校の尋常科・高等科を卒業した者のことである。
- 7) 「初等教育未終了」とは、尋常小学校あるいは小学校の尋常科を卒業していない者のことである。
- 8) 「傭夫」（ようふ）とは、広辞苑によると「やとった人夫。やとわれた男。やといおとこ。」とある。

文献

- 松本尋常高等小学校（1909）優劣等児童に関する調査. 信濃教育, 第二百七十六號, pp.3-9.
- 松本尋常高等小学校（年代不詳）優劣等児童ニ関スル調査書. 国宝旧開智学校所蔵史料.
- 松本市小學校（年代不詳）成績不良児童特殊教育状況. 国宝旧開智学校所蔵史料.
- 中嶋忍・河合康（2006）長野県松本尋常小学校の「落第生」学級に関する史的研究－「落第生」学級の設置・廃止の経緯と成績不良の考え方について－. 発達障害研究, 28, pp.290-306.
- 中嶋忍・河合康（2015）明治41－42年の長野県松本尋常高等小学校における成績不良児童教育に関する史的研究. 上越教育大学研究紀要, 34, pp.129-138.
- 中嶋忍・河合康（2016）明治43－45年の長野県松本尋常高等小学校における成績不良児童教育に関する史的研究. 上越教育大学研究紀要, 35, pp.43-50.
- 中嶋忍・河合康（2018）長野県における劣等児に対する取り組み－松本尋常小学校の場合－. 中村満紀男（編著）日本障害児教育史（戦前編）. 明石書店, pp.248-259.
- 外林大作・辻正三・島津一夫・能見義博（1981）誠心心理学辞典. 誠心書房.